伝承される「ハーメルンの子供たち」

—鼠捕り男または笛吹き男、及び魔術師への変遷—

04K013 石山 恵理

はじめに

「グリム童話」の名で知られる、『子どもと家庭の童話集』*Kinder-und Hausmärchen*（初版1812年）の編者であるヤーコブ・グリム Jacob Grimm（1785-1863年）とヴィルヘルム・グリム Wilhelm Grimm（1786-1859年）の兄弟は、メルヘンや伝説蒐集だけでなく神話学、文献学、辞典の編纂など幅広い研究分野で業績を残している。今回ここで取りあげる、「ハーメルンの子供たち」*Die Kinder zu Hameln* は、『ドイツ伝説集』*Deutsche Sagen*（1816年）に分類されている。

概念としてのメルヘンと、伝説と神話とは互いに似通ってみえるが、ルートヴィッヒ・ベッヒシュタイン Ludwig Bechstein は次のように両者を区別している。

> メルヘンは、伝説ほどではないにせよ、文化史ともやや関係する。もしメルヘンが場所と密接につながっているなら、それは「伝説」と呼ばれる。メルヘンではあらゆる奇跡が可能であり、遠近も年月も月日もないため人類の幼少期と比べられる。必要があれば名前がつけられるが、それは「太郎」といった一般的なものか、逆に奇抜な名前があるだけである。
>
> 一方伝説と神話は、疑わしく、不確かな点が含まれてはいるが、歴史研究の源泉として研究対象となっている。世代や名前、記念物、教会、城館、城郭といった場所的なもの、あるいは森や林、草原、道や橋といった特定の場所に結びついているからである。したがってメルヘンが幼少期と比較されるのに対して、伝説は青年期に比べられる。
>
> 伝説の視界はメルヘンよりも狭く、もっと明確である。さまざまな事柄が、たとえそれが未確定で、歴史的でないとしても、いつ、どこで起きたのか、どの時代に、どの戦争が起こったかを示唆するためである。[1]

13世紀、北ドイツの小麦の集散地だったハーメルンから、約130人の子供たちが姿を消す出来事が起こった。真相は今も尚、謎のままである。グリム兄弟による『ドイツ伝説集』と、イギリスのロバート・ブラウニング Robert Browning（1812-1889年）の詩で一躍外国でも有名になったこの出来事だが、ドイツ国内では当時から知られていた。約700年もの間、知識人がこの出来事に取り組みながら、いまだに全てが解明されない「ハーメルンの鼠捕り男」の伝説はそれだけでテーマとして魅力的だった。

さらに私が、本稿のテーマとして選ぶほどこの伝説に引き込まれたのは、「記憶違い」からである。私は大学生になって改めて『ドイツ伝説集』を手にとるまで、グリムの採集話を「ハーメルンの鼠捕り男」でなく「ハーメルンの笛吹き男」というタイトルだと思っていた。しかし伝説集にはどこにも「鼠捕り男」や「笛吹き男」の字はなく、なぜこのような記憶違いをしていたのかと驚いた。これが単なる「記憶違い」なのか、それとも似た題名の、それぞれ別の話があるのかと、原因を知りたくなったのである。

本稿の第一章では、まず「ハーメルンの鼠捕り男」について、グリム兄弟の『ドイツ伝説集』の場合、ブラ

ウニングの『ハーメルンの笛吹き男』の場合について検討する。第二章では、伝説の時代背景である歴史上の1284年6月26日の出来事に注目し、その歴史的社会的変遷と、それによって変貌させられた伝説の男は、鼠捕り男だったのか笛吹き男だったのか、まったく別の何者かだったのかについて検討したい。

また、一市ハーメルンに起こった出来事が、なぜ国中で知られるところとなり、さらには全世界にまで広がることになったのか、「鼠捕り男」または「笛吹き男」と「子供たち」がシンボル化していった過程を考えてみたい。

第１章　「伝説」の全容

―『ドイツ伝説集』の「鼠捕り男」とブラウニングの『ハーメルンの笛吹き男』―

ハーメルンで起こった「130人の子供たち失踪事件の伝説」をみていくにあたり、グリムの『ドイツ伝説集』とロバート・ブラウニングの『ハーメルンの笛吹き男』*The Pied Piper of Hamelin.*（1849年）を選んだのには理由がある。

グリム兄弟の『ドイツ伝説集』は、兄弟が上巻序文で断っているように「史的要素」[1]が大切にされた書物としてドイツ国内へ広まっていった。130人の子供たちが失踪した出来事は、伝説集が出版される19世紀より5世紀も以前、14世紀頃からドイツ国内に広まっていき、あちこちを訪れる手工業の職人などによる口伝や、史料によって、16世紀にはすでに全ドイツで知られていた。

一方で、ブラウニングの「詩的要素」[2]を強めた笛吹き男（パイドパイパー）の話は、当然のことながらイギリスなどへの影響力が大きく、日本でも絵本として出版されている。ハーメルンでの子供たちが失踪した出来事は、主にこの二つによって世界に知られていくようになったといえることから、選択した。

それではまず、『ドイツ伝説集』ではどのようにこの事件が語られているのか、全文をみてみよう。

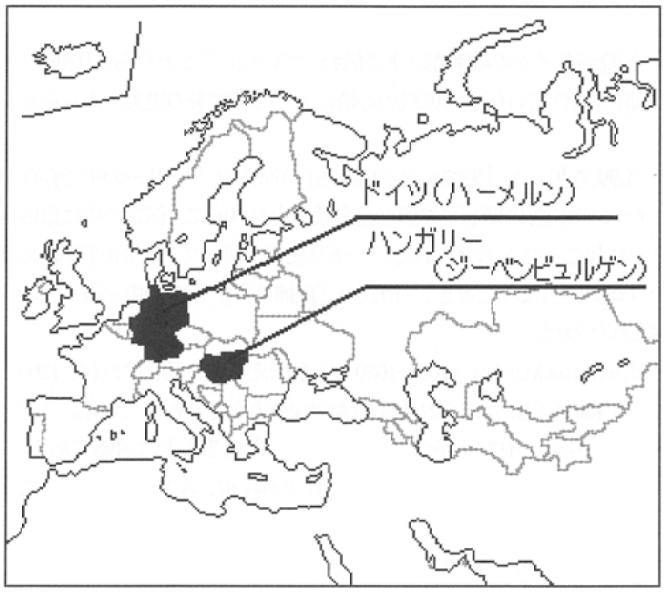
> 1284年のこと、ハーメルンに一人の風変わりな男が姿を現した。この男はさまざまな色が入りまじった布でできた上着を身にまとっていたので、ブンティング（斑ら男）と呼ばれていたという。自分は鼠捕りだと称し、一定の代金をもらえれば町から鼠を退治してやろうと公言した。町の人々はこの男と話をつけ、一定の報酬を与えようと請け負った。そう決まると鼠捕りの男は小さな笛を取り出し、それを吹きならした。すると即座に町のありとあらゆる家々から鼠がはい出してきて、男の回りに集まった。
>
> さて、町の鼠は一匹残らず出てきたと見ると、男は町を出て行き、群れなす鼠はことごとくその後に続いた。そのようにして鼠をヴェーザー河のところまで連れ出すと、男は衣服をたくし上げて河の中へはいって行った。鼠もその後を追い、一匹残らず河に落ちおぼれ死んでしまった。
>
> ところが町の人々は、苦しみから解放されてしまうと約束した報酬が惜しくなり、ありとあらゆる口実をもうけて男に金を与えることを拒んだので、男は立腹して町を去って行った。6月26日、ヨハネとパウロの日の早朝7時に、別の言い伝えによれば正午に、この男は再び町に姿を現した。今度は狩人のいでたちで恐ろしい形相をして赤い奇妙な帽子をかぶっていた。そして横町横町で例の笛を吹きならした。するとすぐさま、今度は鼠ではなしに大変な数の子供が、4歳から上の男の子や女の子が走ってやって来た。その中にはもう成年に達していた市長の娘もいた。群れをなした子供たちはこぞって男の後についていった。男は子供たちを町から連れ出し、とある山の洞穴に入ると子供たちもろとも姿を消してしまった。
>
> ある子守の娘が腕に子供を抱いてはるか後からついて行ったが、その娘がこの出来事を見とどけ、町に戻ると事の次第を町の人々に知らせた。親たちはどの市門からも群れをなして町の外へとび出し、悲しみにうち沈み子供たちを探した。母親は悲嘆にくれ泣き叫んだ。ただちに使者が水路陸路いたるところに遣

わされた。子供たちの一団を、あるいはそのうちの数人でも見かけはしなかったか問い合わせて回ったが、何の成果も得られなかった。

全部で130人の子供が行方不明になった。いく人かの人々の言い伝えるところによれば、二人の子供がおそくなって帰って来たという。そのうちの一人は目が見えず、他の一人は口がきけなかった。そのため盲目の子は子供たちが消えた場所を言えなかったが、どのように笛吹き男について行ったかを話して聞かせ、口がきけない方の子は何も聞いてはいなかったけれども、その場所を教えることができたということだ。もう一人、下着のままで一緒について行ったが、上着を取りに引き返したため、災難を逃れた小さな男の子がいた。この子が戻って来た時には、ほかの子供たちはとある丘の穴の中に消えてしまっていた。この穴は今でも見せてもらえる。

子供たちが町を出て行く際に歩んだ市門を抜けて行く通りでは、踊ってはならず、また弦楽を奏でることも許されなかったので、18世紀の中頃にはまだ(多分今日でもなお)「無太鼓の(太鼓なしの、音なしの、静かな)道」と呼ばれていた。実際、花嫁が楽隊をともなって教会へ行く時にも、楽士はこの通りを横切る際には音をたててはならなかった。子供たちが姿を消したハーメルンのそばの山はポッペンベルクと呼ばれている。この山の右側と左側に十字架の形をした二つの石が据えられた。いく人かの人々が言い伝えるところによると、子供たちはとある洞穴の中に連れて行かれ、ジーベンビュルゲンで再び姿を現したという。(図1参照)[3]

図1　ハーメルンからジーベンビュルゲンへ



ハーメルンの町の人々はこの事件を市台帳に記入させ、告示を行う際には、子供たちが行方不明になってから経過した歳月を挙げるのが常であった。ザイフリートによれば、市台帳に記載されている日付は、6月26日ではなく6月22日であるという。市庁舎には次のような銘文が刻まれている。

主キリスト生誕の後1284年
ハーメルンで生を享けし子等130人
笛吹男に連れ出され
ケッペンの山中へと消ゆ

そして新門には次のような文字を見ることができる。

魔術師130人の子等を市より連れ出せしより
272年の後此門は建てられたり　[原文ラテン語]

1572 年に市長はこの出来事を教会の窓に描かせ、それに必要な文章を添えさせたが、その文字はほとんどが読めなくなってしまっている。またこの出来事にちなんだ貨幣が鋳造された。[4]

以上が、グリム兄弟によって編纂された「ハーメルンの子供たち」の全文である。『ドイツ伝説集』の編者である H. J. ウターの注釈によれば、グリム兄弟がこの伝説の編集にあたり参考とした出典は、ニーレンベルガー、キルヒマイヤー（1701 年）の著書で引用されているキルヒャー（1650 年）の第 2 巻 3 章 232 頁以下、ヴァイヤー（1586 年）の著書の第 1 巻第 16 章 43 頁、エーリヒ（1654 年）、ベヒェラー（1601 年）、マイボム（1688 年）、それにゴットシャルク（1814 年）等の著作である。[5]

この伝説の史実を求めて時代を遡っていくと、「失踪した子供たち」について記録されているのみで、「鼠捕り男」または「笛吹き男」はどこにも出てこない。彼が現れるのは、1500 年以降の二次史料だけである。これに関し阿部謹也は、著書『ハーメルンの笛吹き男』（1988 年）の中で、「1565 年以前の〈ハーメルンの笛吹き男伝説〉には鼠のモチーフはまったくみられず、ただ 130 人の子供の失踪を伝えているだけ」[6]であると述べている。

また、「すでにこの頃にハーメルンの町の伝説がドイツの最南端にまで伝わっていた」[7]ことから、「鼠捕り男」または「笛吹き男」のモチーフはそれ以降の時代で口伝する庶民の心情によって、本来の史実に入り込んで変遷していったとみることができる。

『ドイツ伝説集』で「鼠捕り男」または「笛吹き男」と「失踪した子供たち」が同じストーリーの中で存在していることからして、グリム兄弟がハーメルンの伝説に関して参照した多数の史料以前に、伝説の中に鼠捕り男が取り入れられるような出来事が語り手に起こったと考えられる。つまり史実に対して、「なぜ子供たちは失踪しなければならなかったのか」という疑問が生まれたとき、「市民が『鼠捕り男』との約束を破ったからだ」という「回答」が身近な経験から生まれたのだ。

自然科学者のアタナシウス・キルヒャーAthanasius Kircher（1601-1680 年）が伝えるところによれば、1200 年頃のハーメルンでは鼠が急に繁殖し、穀物も果物も鼠にかじられ市民が大変な被害をこうむっていた。[8]その災難と、子供たちが失踪するという悲劇とが語り手の中で結びつけられたのだと考えることは可能である。

時代ごとの変容をとりのぞき史実に遡る試みと、「鼠捕り男」と「笛吹き男」の違いについては、第二章で考察することにして、ここではブラウニングの詩を読んでみよう。

ブラウニングの詩は、全文を載せるにはあまりに長いため、主要な部分をみていこう。

ロバート・ブラウニングが『ハーメルンの笛吹き男』の物語を書いたのは、友人の息子であるウィリアム・マクレディという少年のためだった。病気で寝こんでいた少年を元気づけるために、挿し絵をつけられる、楽しい物語を絵の好きな少年に贈ろうと書かれたのだった。

ブラウニングは笛吹き男を次のように描写している。

「とてもふしぎなかっこうの人でした！／あたまからかかとまでとどく、ながい奇妙なマント。／それも、黄いろと赤のしまもようのマントです。／その男は背がたかくて、やせていました。／ピンのようにするどい、青いふたつの目。／たばねていない、ばらばらの髪。日にやけた肌。／ほおひげも、あごひげもありません。／ほほえみが、くちびるのはしに消えてはうかびます」[9]、「墓にねむるわが家のひいじいさんが、／世の終わりをつげるラッパの音で、立ちあがって、／ここにやってきたみたいだ」[10]

さらに、鼠や、足が悪かったのでひとり残されてしまった子供が、笛吹き男の音について語る次のような描写に、ブラウニングの、病床のウィリアム少年に対する励ましがみられる。

「ねずみの国のみんなへの報告によれば、／『さいしょに、するどい笛の音が、／胃をくすぐるように、ひびいてきたのです。／それは、とびっきりあまいりんご酒をしぼるような、笛の音でした。／それは、ピクルスの

桶のふたをあけるような、笛の音でした。／それは、砂糖づけの戸棚をあけはなすような、笛の音でした。／それは、鯨油びんのコルクをひきぬくような、笛の音でした。／それは、バター樽のまわりのたがをこわすような、笛の音でした。／それは（ハープやリュートよりも、きくものをうっとりとさせる）“ねずみたち、よろこべ！”と呼びかける声のような、笛の音でした。／“いまやこの世は、でっかい食べもの屋だ！／むしゃむしゃ食べろ、ばりばりかじれ、かるい食事も、朝食も／夜食も、夕食も、昼食も、ぜんぶ食べ放題だ！”／すぐ目のまえで、砂糖の大がめが、こなごなにぶっこわれて、まるで、／でかい太陽みたいに、目くらむほどに、まぶしい光をまきちらし、／“こっちだ、こっちだ！”と、よんでいるようでした。／そして、気がついたら、ヴェーゼル河でおぼれかけていたのです』[11]、「みんなを、すぐそこにある、この町とつながっている／すてきなところへつれていく。笛吹き男は、そう言ったんだ。／そこは、水がほとばしり、くだものの木々がそだち、いろうつくしい花々がさきこぼれ、なにもかも変わっていて、／いままで、知られなかったところ。／そこは、クジャクよりもきれいなスズメがとんでいて、犬は、しなやかな鹿よりはやくかけぬけていき、／ミツバチは、人をちくりとさす、針すらもっていなくて、／そして、ワシのつばさをはやした馬が生まれてくるところ。」[12]

またブラウニングは、リチャード・ローランド・ヴェルステガンによる『衰退した知性の復権』*Restitution of Decayed Intelligence*（1605年）を基にしたナサニエル・ウォンレイの『目に映る世界の不思議』*Wonders of the Visible World*（1687年）を参考としたためか、詩を書いた際に「1284年6月26日」という一般的な日付を使わず、「1376年7月22日」と日付を変えている。

ヴェルステガンは著書の中で、出来事が起こった日付は、1376年7月22日であると主張している。しかし14世紀初頭から19世紀にいたるまで、やはり6月26日という日付が一貫して伝承されていることを述べておきたい。[13]

次の第二章では、伝説の変遷前の史料や、変遷したことによる「鼠捕り男」または「笛吹き男」の出現、伝説の諸解釈についてみていきたい。

第２章　「伝説」の変遷

(1)　1284年6月26日の出来事と諸解釈

ハーメルンで130人の子供たちが失踪する出来事の起こった13世紀末は、どのような時代だったのだろうか。13世紀末といえば一般的に知られる「暗黒の時代」への突入期であるが、中世のヨーロッパは本当にそのような時代であり、その時代に生きた人々は当時を「暗黒期」だと考えて生活していたのだろうか。

例えば12、3世紀には、アリストテレス哲学を中心としたギリシア的な知識体系と、キリスト教とを融合させたスコラ学が誕生し、大学が成立している。14、5世紀には、製紙術がヨーロッパ中に拡がり、印刷術も確立することで、書物が大量に生産され学問の性格や説教の在り方も変わっていった。また中世末期は、時計が急速な進歩をとげて市民にまで普及していった時代だった。

当時の人々は決して生活のための進歩や発展に消極的でなかったことが、このような事実から推察される。では、ドイツはどのような情況にあったのだろうか。

当時の「ドイツ」には、ドイツ人もドイツ国家も存在しなかった。当時の人々が理解していた「ドイツ帝国」には、実際のところフランス人やイタリア人、チェコ人などが居住し、逆にドイツ語を話す人々が「ドイツ」の外で生活していた。

この時期は、第2開墾期の終わりを告げる時期でもあった。つまり人口の増加によって都市が勃興し、反面、森が著しく減少し出した時期だった。

10世紀、森林はヨーロッパの半分以上の土地を覆っていたと推定される。[1]入植されないままの原生林では、

飢え死にや狼の餌食になる危険性もあった。

例えば1073年には、ザクセンの貴族の反乱にあったドイツ王ハインリヒ4世 Heinrich Ⅳ (1050-1106年、在位1053-1105年) が、数人の家来と共にハルツブルクの城を脱出後、4日間もかけて大原生林を抜け逃亡した。4日目にエッシュヴェーゲに到着したとき、王たちは食料不足と睡眠不足、長い道のりで疲労困憊していたという。[2]

一方で、人々にとって森は狩りをする場であり、放牧や養魚池での釣り、木の伐採や枯葉を拾い集められる場だった。これは森の所有権を王が名乗っていた時代のことであり、やがて封建制に移行した社会において、森は領主のものとなった。領主が娯楽やスポーツで狩猟をするために、市民や農民たちの森林への侵入は厳しく規制された。

こうして森林が領地とともに囲い込まれることで、人々が近づくことを妨げられた森の大部分は、大開墾期まで手付かずで守られることとなる。一方で、人里離れた荒地や人がめったに足を踏み入れない森、隔絶した山間地は、修道院――あるいは、山賊――が村落を切り開いていった場でもあった。

領主たちが開墾へ積極的になった第2開墾期も終わりの頃、ドイツのハーメルン市では130人の子供たちが失踪する出来事が起こったのである。

> 1284年、この年は男と女が消えうせた年であり、130人の愛すべきハーメルンの子供たちが天意によってか奪い去られた「ヨハネとパウロの日」のあの年である。人はいう、カルワリオが子供らを皆生きたまま呑み込んだと。キリストよ、このような不幸にみまわれないように罪人を守り給え。
>
> 1284年、「ヨハネとパウロの日」にカルワリオ山に入っていった130人の子供たちが行方不明になった。

上記は、ハーメルンの郷土史家ハンス・ドバーティンH. Dobbertin.が、1384年頃のハーメルンのミサ書『パッシオナーレ』のタイトルページにラテン語で書かれた脚音詩を『ハーメルン市史集成』(1761年) に再現した文章である。[3]これから読み取れることは、1284年のヨハネとパウロの日、つまり6月26日に、ハーメルンから130人の子供たちが失踪した、という出来事である。

130人もの子供たちが失踪したという事実は、長い間ドイツや他の国の研究者によっても注目され、研究され、論じられてきた。だがほぼ400年にわたる研究史の中にあってもいまだに解明はされていない。伝説にあらゆる角度から多数の解釈がなされ、もはや事実を確かめようがないからである。

では多くの解釈とは何なのか。ヴォルフガング・ヴァン W. Wann.はこれまで試みられた解釈を25のテーゼに分類しており、阿部は中でも以下に示す8つの解釈とその他3つの説を検討している。

①舞踏病　1590／1604年（ヨハネス・レッツナー）

②ジーベンビュルゲンへの移住　1622年（論者不詳。これは事実の解釈というよりは伝説の域に入るもの、と註記されている）

③子供十字軍　1654年（サミュエル・エーリッヒ）

④1285年に偽皇帝フリードリッヒ2世（例えばティレ・コルップ）のあとをついていった　1659／62年（マルチン・ショック）

⑤崖の上から水中に落ち溺れ死んだ　1659／62年（同前）

⑥地震による山崩れで死亡　1659／62年（同前）

⑦1260年のゼデミューンデの戦で戦死した　1741年（J・C・レーガー）

⑧死の舞踏の叙述から派生したもの　　1905年（R・サリンジャー）

以上がヴァンの分類からの8説であり、そのほか3説は「東ドイツ植民説（1949年、ヴォルフガング・ヴァン）」、「東ドイツ植民遭難説（1958年、ハンス・ドバーティン）」、「ポッペンブルクの湿地帯で底なし沼にはまり込んだ、遭難説（1940年、M・ヴォエラー）」である。[4]

ヴァンとドバーティンは、同じ植民説でありながら理論も終着点も異なっている。ヴァンの理論が、「笛吹き男」として語られることになった法的な植民請負人が、子供たちを連れて行き事業を遂行した、という結論に達するのに対し、ドバーティンは、子供たちと語り継がれているのは、実は成年した若者たちで、彼らが東ドイツへ入植にでかける途中どこかで事故にあい遭難したに違いない、という結論に達している。

両者は、このように異なった理論と結論を述べているが、まずヴァンの理論は、当時出生数の減少やペストによって、農業労働力の著しい低下がみられたハーメルンにおいて、130人の働き手たちを両親がみすみす手放すとは考えにくい。またドバーティンの理論は、理論に都合の良い史料を集め、裏づけを怠っている印象がいなめない。よって両者の説は、130人の子供たちの失踪の解釈としては、納得しがたい、というのが阿部の解釈である。

中世において、子供十字軍や舞踏病[5]によって大勢の子供が突然失踪することは、他の地方でもみられた。[6]たとえば1212年5月に、フランスで羊飼少年シュテファンは説教によって数千人の少年少女と、若い司祭や若輩の巡礼者も加えたその他3万人――この数字は同時代の人の誇張であると考えられるが――をひきつれマルセイユまで行進し、そこで2人の商人の運送船に乗り込んだまま行方が分からなくなった。そのため、この商人たちは奴隷商人だったのではないか、ともいわれる。[7]

同年、ドイツのケルンでも子供十字軍が発生し、一説には少年少女、成人した男女あわせて数千人の集団がエルサレムを目指した。しかしこの十字軍の遠征は挫折し、子供たちは帰郷したといわれる。1237年には、エアフルトの「1000人」の子供たちが突然14キロ離れたアルンシュタットまで「使徒は遣わされたり」と歌いながら踊り歩き、疲労の末倒れた。アルンシュタットから連絡を受けた両親が、子供たちを迎えに行ったという。[8]

そのため、ハーメルンの子供たちもこれらと似たような様子で失踪したと考えることは難しくない。また、ハーメルン市ならではの地形に注目したヴォエラーの遭難説も、6月26日の夏至祭と絡めて無理がない。

子供たちが失踪したといわれる「コッペン」なる呼称で現在も呼ばれるコッペンブリュッゲ Coppenbrügge は、ハーメルンの東方15キロの地点にある丘である。そこでは、例えばヨハネ祭の日――6月26日――には夏至の火を崖の上に灯す習慣があった、など、古くから儀式、祭祀、埋葬などが行われていた。[9]しかし、広い湿地帯の窪地と、羊歯やコミヤカタバミの生い茂る薄暗く険しい崖、しばしば発生する霧によって、多くの人が落ちて亡くなっている場所でもあることから、しだいにデーモン化され恐れられる土地になっていった。[10]

そのためヴォエラーは、子供たちの失踪について、祭りで興奮した子供たちが、夏至の火を崖の上に灯しに出かけ、その湿地帯にある底なし沼にはまり脱出できなくなった、と考察している。なぜなら――全文は後で引用するが――リューネブルク手書本によると、子供たちが出かけていくさまを目撃したひとりの母親はそれを不審に思っていなかった。[11]つまり、子供たちの出発は異常な出来事ではなかったからである。

この解釈で130人の子供たちの失踪を納得することはできるが、すでに述べたように、長期にわたる研究によって数多くの説得力を持つ解釈がなされているために、この解釈をもって、「130人の子供たちの失踪事件は解明された」とは、すぐに言えることではない。

では次に、出来事はなぜ変遷していったのかを、時代の様子と共にみていきたい。

(2)　1284 年 6 月 26 日の出来事はなぜ変遷していったのか

現代のハーメルンは、北ドイツのニーダーザクセン州南部の交通の要地で、商工業の中心都市となっている。1426 年に、ヨーロッパ北部の経済圏を支配した都市同盟であるハンザ同盟に加盟し、以降はヴェーザー川の貿易港として商工業を発展させてきた。

そもそもハーメルンは、ヴェーザー川とフンメ川が合流する町なので、この大河がブレーメンや北海へと流れることから、中世より河川交通の要所として繁栄してきた。16 世紀から 17 世紀にかけては裕福な市民階級も出現し、町の中心にはその館が残っている。

17 世紀には30 年戦争へ巻き込まれ一時荒廃するが、商工業の発展する以前にも、13 世紀頃のハーメルンは、北ドイツの小麦の集散地として製粉業が盛んだった。一方で、ハーメルン市は同時代の他の町と同様に深刻な鼠の被害に悩まされていた。

第 1 章で紹介した『ドイツ伝説集』の全文から分かる通り、グリム兄弟は鼠が及ぼした被害についてブラウニングやキルヒャー程には触れていない。ブラウニングとキルヒャーはそれぞれの絵本と著書の中で、1200 年頃にハーメルンの町に繁殖した鼠が、穀物庫や各家庭の貯蔵庫、犬猫や人間――大人から赤ん坊――にもかじりつき人々を途方に暮れさせたことを詳細に伝えている。

両筆者はさらに、ハーメルンに奇妙な姿の男が現われたこと、男は報酬の約束をして鼠を退治したが、市民が約束を反故にしたために怒って子供たちをさらっていったことを、伝えている。しかし第一章で述べた通り、もとの史実には鼠捕り男または笛吹き男は登場しない。

鼠捕り男とハーメルンが初めて結び付けられたのは、チンメルン伯フローベン・クリストフ Froben Christoph と書記のヨハネス・ミュラー Johannes Müller による『チンメルン伯年代記』(1565 年頃) の中である。

この記録によれば、次の二つの鼠駆除の記録の間にハーメルンの伝説が挿入されている。1538 年にメスキルヒで起こった大量の鼠の被害を、ベルリンゲン出身の冒険家アーベントトイアーが駆逐したことと、1557 年にシュヴァーベンガウで激増した鼠による被害があったこととの間に、入る。[12]

130 人の子供たちの失踪と、鼠捕り男が結びついたのはこの年代記が初めてであり、話の筋は『ドイツ伝説集』とそっくり同じである。第一章でも触れたが、この記録によって、当時 130 人の子供たちの失踪はドイツの最南端にまで伝わっていたことが分かる。

では、この話を伝えたのは誰なのだろう。

それまで木版画や銅版画、あるいは書物によって情報を得ていた人々は、「彼ら」の登場によって多大な影響を受けた。彼らとは、各地を放浪する「あぶれ者」Außenseiter たちである。彼らの職業は、物乞い、大道芸人、遍歴楽師、綱渡り師、象と熊の見世物師、芝居一座と人形使い、障害を見世物にする身体障害者など多様であった。

封建社会の作る世界の外に追いやられた彼らは、生活を維持するためのあらゆる技を身につけながら各地を放浪し、情報伝達者としての機能を果たした。また、人々の心性への影響力も持っていた。彼らの職業は主に人を笑わせることを目的としていたからだ。

しかし、中世のヨーロッパにおいて「笑い」とは敵視されるものだった。特に現世厭離の考えを持った中世の修道士たちは、笑いを激しく非難し、規制すらしていた。[13]とはいえ、修道士たちが厳しい非難を向けた「笑い」とは、口を開けるような過度の笑いが多い。

一部の聖職者や高位聖職者の中には、説教において笑いが役に立つことを認めている者もあった。また、口元に浮かべる静かな微笑ならば許容されていた。むしろ、難しい説教者は嘲笑の的になる。「すべての言葉は理解されなければなら」[14]ず、その為になら説教者はユーモアも持たねばならなかった。

このように、「笑い」への規制があった聖職者や上流社会の人々――特に女性――に対し、騎士や世俗の人々の笑いはもう少し自由だった。特徴の一つとして、中世文学の笑いは、全体的に身分の低い人々をからかいの対象としている。または身体障害者の人々を、当人や先祖が罪を犯した結果だと考えてからかいの対象としていた。あるいは騎士道物語では、ユーモアよりも皮肉の方が多い。人々は可笑しいから笑い、嘲りのために笑い、時にはペストなどへの恐怖のために笑った。

その「道徳的に正しくない」欲求を満足させるために、放浪者たちは各地を旅していた。彼らは人々を楽しませ、情報を伝達することから歓迎され、言葉や態度、宗教的な理由によって恐れられた。

世界の外の者である彼らは、円環の中にいる人々にとって、秩序から外れたならず者だった。ハーメルンの130人の子供たちが失踪した出来事に、鼠捕り男または笛吹き男が絡められていった理由の一端は、こうした人々の偏見にあった。人々は彼らを「名誉なき人々」unehrlich[15]だと差別していたが、一方で楽しみや気晴らしは、人々にとって必要なものだった。

中世において「自由時間」Freizeitというのは、夕刻以降の「市場の平和」Marktfriede（市が立つ間だけ保障される平和のこと）が適用されなくなった時間のことであり、19世紀以降に用いられ始めた余暇などの意味を持たなかった。[16]それは共同体としての遊びSpielと異なる、単独の気晴らしの時間だった。しかし人々の自由時間には、規制が多かった。

中世後期の都市の条例は、南北を問わずに賭博禁止令が多い。特にサイコロを対象としたものが目立ち、1419年のゲッティンゲンにおける「ナイフ遊び」禁止令のように、遊びが名指しで禁止されることは稀だった。規制があり罰則があるにもかかわらず、追加規制が次々に書き加えられていっていることから、条例にはまったく効果がなかったのだと推察できる。

人々の生活はそれだけ娯楽が少なかったのか。それとも、禁止されればされるだけやりたくなる、という人間の天邪鬼な心は、昔も今も変わらないのかも知れない。庶民だけでなく、修道士や、貴婦人までもが、法の目をかすめては賭博に興じた。

するといかさま賭博師も現れてくるもので、当時の詩人たちは賭博師やいかさま師を次のような歌で非難している。

「遊び人、賭博師、男女の取り持ち、／ならず者の旗をかかげる輩、／いかさまサイコロ使い、そしてスリ／よりひどい悪党を今まで誰か見たことがありますか。」[17]、「詐欺師、刑吏、陰口叩き、ほら吹き、偽善者、偽の聖遺物売り、浮浪者、宿無しと大嘘つき。」[18]

それでも人々は、遊びや気晴らしで楽しむ喜びを手放さなかった。時代が変わっても、人が人生に喜びを求めるのは変わらないということである。

こうした当時の事情や偏見がハーメルンでの出来事に入り込んでいく事実を確認するために、ここで1719年にライプニッツLeibniz（1646-1716年）の協力者ダニエル・エーバーハルト・バリングDaniel Eberhard Ballingによってリューネブルクの文書館で発見されたリューネブルクの手書本を読んでみよう。この手書本はその後、再発見される1936年まで眠り続けることとなる。

リューネブルクの手書本は、15世紀の資料としておそらく最も古い、ミンデンの修道士ハインリッヒ・フォン・ヘルフォルトHeinrich von Herford（?-1370年）の『金の鎖（カテナ・アウレア）』の筆写本の最後のページに追記されたもので、その書体から1430～50年に書かれたものとみられている。

先に、130人の子供たちが失踪した出来事について数ある解釈を25のテーゼに分類した歴史学者として紹介したヴァンは、ヘルフォルトが「私はこのことを古い本でみた」と書いているところから、その古い原本を教会法的な意味での「古い（アンティクアAntiqua）」という概念からみて、少なくとも筆写された時より60年以上古い1370～1390年頃のものと推定している。[19]

まったく不思議な奇蹟を伝えよう。それはミンデン司教区内のハーメルン市で主の年1284年の、まさに「ヨハネとパウロの日」に起こった出来事である。30歳位とみられる若い男が橋を渡り、ヴェーゼルフォルテから町に入ってきた。この男は極めて上等の服を着、美しかったので皆感嘆したものである。男は奇妙な形の銀の笛をもっていて町中に吹きならした。するとその笛の音を聞いた子供たちその数およそ130人はすべて男に従って、東門を通ってカルワリオあるいは処刑場のあたりまで行き、そこで姿を消してしまった。子供らが何処へ行ったか、一人でも残っているのか誰も知るすべがなかった。子供らの親たちは町から町へと走って（子供たちを探し求めたが）何も見つからなかった。

そして一つの声がラマで聞こえ（マタイ伝2ノ18）、母親たちは皆息子を思って泣いた。主の年から一年、二年、またある記念ののちの一年、二年という風に年月が数えられるように、ハーメルンでは子供たちが失踪したときから一年、二年、三年というように年月を数えている。私はこのことを一冊の古い書物でみた。院長ヨハンネス・デ・リューデ氏の母は子供たちが出てゆくのを目撃した。

この同じ小都市ハーメルンでは1347年7月24日にも次のようなことが起こった。ひとつの排水溝は長い間鉄張りの戸で閉じられていた。1人の子が排水溝のなかに落ちてしまった。三人の兄弟が、最初に落ちた子を助け上げようとしてなかに落ち、皆そのなかで窒息死してしまった。この排水溝のなかには竜かバジリスク（人を睨み殺すといわれる怪蛇）がいたと人はいう。だがそのなかで長い間閉じ込められていた空気が悪くなっていたからだ、とみた方がよいだろう。[20]

上記の通り、14、5世紀に1284年の出来事へ笛吹き男が絡められた時、手書本では「上等な服を着た30歳位の美しい男」と描写されていた。手書本の信憑性について阿部は、筆者は、後半で1347年の出来事とその原因について述べたとき、「不思議な出来事」とおそれおののくのではなく、一酸化炭素中毒または酸欠などによって死亡した、と科学的に考えているとして、書き手を評価している。この書き手の冷静な態度からして、前半の部分についてもかなり正確に当時の人々のイメージを再現している、と考えてよいと、阿部は述べている。

ここで、第1章で引用した『ドイツ伝説集』を改めてみてみよう。「彼」は登場する際に「自分は鼠捕りだ」と名乗っているが、市庁舎に刻まれた銘文には「ハーメルンで生を享けし子等130人／笛吹男に連れ出され」と記されている。

ヴェーザー風ルネッサンス様式の旧市庁舎は13世紀末に建築され、14世紀から16世紀にかけて増築し現在の姿になっている[21]ことから、銘文はこの間に彫られたのではないかと推測される。

鼠駆除を依頼される者としてなぜ他の遍歴芸人ではなく笛吹き男なのかという関係を明らかにするために、『ドイツ伝説集』の「鼠捕りの男」*Der Rattennfänger*を簡単にみてみよう。

「ハーメルンの子供たち」の後に続く「鼠捕りの男」の伝説は、鼠の被害に苦しんだ人々が鼠捕りの男を頼り、退治して貰ったという話である。鼠捕りの男の鼠退治の方法について、この伝説では次のような一文から始まる。「鼠捕りの男はある一定の音色を心得ており、その音色で九回笛を吹くと、あらゆる鼠がその意のままに、池や水溜りの中まで後を追ってくる。」[22]

まるで魔法を使ったような話だが、これはまったくのおとぎ話として終わらない。20世紀、イギリスのノーサンプトンシャーで、長年鼠を観察し続けたヘイウッドという男が、ある種の笛によって――ノロシカの狩人がその牝の声を真似て獲物を招き寄せるように――招き寄せ、鼠退治に大きな効果をもたらしたという。[23]

ただ伝説集での語り口は、「この男は、はしばみの木でできた杖に不思議の細工をほどこし、鼠という鼠はすべて魔法にかけられてこの杖に寄りつき、この杖を手にしている者の後を追わねばならないようにした」[24]とややメルヘン的である。

このような鼠捕りの男の類話は多い。ハーメルンの鼠捕り男または笛吹き男だけが特別な存在だったのではなく、鼠が大量発生した当時、どの町でも鼠の被害に苦しみ、いずれの町でも共同体の外から来たあちこちを遍歴する者が、代々受け継いできた秘法によって鼠を退治している。

秘法の内容はさまざまで、水車小屋の傍に鼠を寄せ付けない何か――おそらく鼠の嫌いな臭いを出す粉だろうと推察される――を置いた、とか、袋から小さな悪魔を取り出しながら魔法の呪文をとなえた、などの他、笛を吹いて鼠を退治した伝説は、オーストリアやアイルランドでもみられる。[25]

これ以上ヨーロッパ全土において鼠捕りの男と笛が結びついたケースを探っていくのは本稿の主題から逸れるため、話を16世紀の資料へ戻そう。

16世紀の資料として、『ドイツ伝説集』の「ハーメルンの子供たち」にある、新門に彫られた碑文を読んでみよう。そこには「魔術師130人の子等を市より連れ出せしより／272年の後此門は建てられたり」とある。この碑文により、1284年から272年後の1556年には、鼠捕り男または笛吹き男が魔術師への変貌を遂げていた事実を読み取ることができる。

ここで鼠捕り男または笛吹き男は魔術師とされたが、それは手品師を連想するような単なる魔術師Zauberkünstlerよりは、神秘的な隠れた世界の支配者である魔術師Magierのことを意味した。では、いったいなぜ「彼」は魔術師へと変貌していったのか。

1551～53年にかけて、ハーメルンでは洪水やペスト、火災などの災害が立て続けに起こり一般市民を怯えさせた。当時はさらに、災害への畏怖に加え、15世紀以降、「貧困とは何か」に対する一つの答えを求める動きが広まっていた。

都市ごとに規模や経済構造が異なるとはいえ、労働市場で生計を立てるのは大変なことだった。現実の貧困の前に、貧しさは倫理的、宗教的に再評価される試みが中世では繰り返された。[26]

その問いに対して、15世紀にネオ・プラトニズムやヘルメティズム（ヘルメス主義）を中心とする魔術的な世界観が拡大した影響から、占星術が再び人気を集めるようになると、人々は一つの答えを見つけたのである。

人々は「どの惑星の徴の下で生まれるかが、その人の性格と運命を決定づけ」[27]ると考え、「キリスト教的思想のみならず、生まれが物を言う身分制原理をも相対化する『惑星人類学』」[28]を生んだ。そして、「人間の運命を決定づけるのはたとえば社会の合理的なメカニズムなどではなく、何らかの秘められた力に違いない」[29]と、貧困を、運命づけられたものだと考えた。

市当局は、人々の災害への恐怖と不条理な貧困への恨みを抑える方法として、それまで口伝のみだった130人の子供たちが失踪した出来事を時代に合う伝説として作り上げ、1556年に、先にみたようなラテン語の碑文を彫った。1284年の出来事を教訓とし、新しい生活規範を作るためである。つまり、「親たちの監督不行き届き」だとか、「庶民の不行跡」の結果だという見解を示して、市民たちの生活を正したいと期待したのである。

以上をみてくると、「魔術師」とは、ハーメルンの市当局やその思惑を助ける学者[30]によって生み出された非道徳者への警告であったと考えられる。また、「鼠捕り男」とは、鼠の被害に苦しめられ奇跡を望んだ人々の生み出した、時代の特徴であったと捉えることができる。

ここで気づくことは、教訓としても奇跡としても、起こしたのは秩序、あるいは世界の外にいる芸人だったことである。秩序の中で生活する人々――特に子供――は、定住地を持たずにさまよう、人々へ「道徳的でない」楽しみを提供する外の世界の彼らに対して、軽蔑や恐れ、自由への憧憬や不可思議な力、などをみていたのだと考えられる。

入植や疫病、十字軍遠征や舞踏病などによって子供たちが失踪したり、子供たちを失うことの珍しくなかっ

た時代において、ハーメルンでの130人の子供たちが失踪した出来事の伝説や物語が今なおドイツ国内だけでなく世界の人々に語り継がれているのは、この出来事を彼らの存在と結合させたからに他ならない。

この伝説または物語にふれた人々は、笛を吹くだけで奇跡を起こし報酬を要求した楽師や、約束を破り報いを受けた市民に対し、勤勉な者は「なまけ」をみて、信仰心の篤い者は「道徳」をみて、知的好奇心の強い者は「疑問」を覚え、あるいは子供たちの行方を心配したりした。

このとき私たちは、この伝説が長く語り継がれてきた理由に、130人の子供たちへの哀惜だけではなく、鼠捕り男または笛吹き男の起こした奇跡ないし魔術の奥に、「謎」に魅せられる人間の好奇心と、知ろうとせずにはいられないその性を発見することができる。

おわりに

130人の子供たちが失踪した当時から700年以上も経過した現代において、出来事は口伝の伝説だけだった頃に比べると様々な姿で人々に知られている。例えば本稿でみてきたグリムの伝説集や、ブラウニングのような詩人や絵本作家、小説家たちによる文学の、またはハーメルン市マルクト広場の特設舞台で上演される野外劇をはじめとした、劇などの題材としてである。

マルクト広場での野外劇では、上演の後、斑色の衣装と帽子を身に付けた「鼠捕り男」役が、劇に出演した鼠に扮した子供たち全員を連れて町を練り歩く。

図2　鼠捕り男についていく鼠

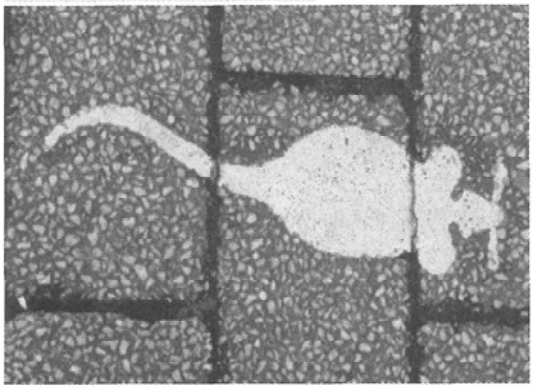


図3　鼠捕り男についていく鼠達

ハーメルン市では、地面にペイントされた鼠の行進についていけば、野外劇も含めた観光名所をぐるりと見て回ることができる。例えば「結婚式の館」などで鼠捕り男の仕掛け時計を、市庁舎の前では鼠捕り男をモチーフにした現代彫刻を、「鼠捕り男の家」を見学し、あるいは土産物屋やパン屋など多くの場所で鼠と鼠捕り男を目にすることができる。(図2、図3参照)[1]

今回、参考資料を集めるためにインターネットを巡ったり、友人と卒業論文について話し合ったりしているうちに、現代において、「ハーメルンの鼠捕り男」や「ハーメルンの笛吹き男」という物語が、もとは伝説であると知る人より、それが創作童話であると思っている人の方が圧倒的に多いことも知った。けれども、伝わり方が変化したり、日付や内容にいくつかの食い違いが現れたりしても、失踪した子供たちの存在と、人数は決して変貌しない。

グリム兄弟は、伝説集でこの伝説を取り上げる際に、タイトルを「ハーメルンの子供たち」とした。鼠捕り男と笛吹き男、魔術師が入り込んだ伝説の中で、この伝説における確たるものが何であるかと考えた末の答えだと推察できる。

しかし、伝説の中心は子供たちであっても、今日にまで語り継がれてきたのは「彼」と結合されたからであり、伝説を残そうとした人々の心情があったからだというのは、第２章でみてきた通りである。

ハーメルン市における130人もの子供たちが失踪したこの事件は特異であり不運でもあるが、第２章で述べた通り、鼠捕り男に鼠退治を依頼して成功した後、村人が報酬を渋り結果的に報酬以上のものを失ってしまうというような類話は、他にもみられた。しかし、出来事のあった年から年代を数え始めたという点は、ハーメルン独特のことである。

第１章で引用した『ドイツ伝説集』にもあるように、ハーメルンの市民は子供たちの失踪の日を起点にして年月を数えていた。市は町全体で子供たちを失ったことを悲しみ、時にその当時を生きる市民のために、市の記録簿やステンドグラス、碑文などの様々な方法で後世に伝説を残している。

このような人々の心情が、出来事へ遡るための手掛かりをあちこちへ残し、伝説を語り継ぐための多様な可能性を提供している。ハーメルン市は現在、有名な観光地になった。人によって覚える形は違い、これからもなされる諸解釈によって新しい歴史的真実が明らかにされるかもしれないが、人々は、約700年前に失踪した子供たちの存在を、今後も大切に語り継いでいくだろう。

註

はじめに

（1）橋本孝『グリム兄弟とその時代』パロル舎、2000年、p.108-109。

第１章

（1）桜沢正勝／鍛治哲郎訳『グリム ドイツ伝説集（上）』人文書院、1987年、p. i。

（2）同上。

（3）図１ http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/europe.html

（4）桜沢／鍛治、前掲書、p.283-287。

（5）Hans-Jörg Uther『Deutshe Sagen』München(Diederichs)、1993年、p.309。

（6）阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男ー伝説とその世界ー』筑摩書房、1988年、p.25。

（7）同上、p.25。

（8）同上、p.23-24。

（9）ロバート・ブラウニング、長田弘訳『ハーメルンの笛吹き男』童話館出版、2003年、p.10。

(10)同上。

(11)同上、p.18-19。

(12)同上、p.30。

(13)溝井裕一「異界が口を開けるとき」『ドイツ文学』133、日本独文学会、2007年所収、p.210。

第２章

（1）伊藤進『森と悪魔』岩波書店、2002年、p.29。

（2）同上、p.29,31。

（3）阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男ー伝説とその世界ー』筑摩書房、1988年、p.29-30。

（4）同上、p.37-38。

（5）舞踏病（ぶとうびょう）とは、意思に反して顔面、胴体、手足が動き、踊りを踊っているような症状があらわれる病気の

ことである。その他の症状として、痴呆、幻覚、妄想、興奮、怒りっぽいなどの症状があらわれる。「ハンチントン舞踏病」、「舞踏病症候群」など。

(6)溝井裕一「異界が口を開けるとき」『ドイツ文学』133、日本独文学会、2007年所収、p.211。

(7)阿部、前掲書、p.149。

(8)同上、p.150-151。

(9)同上、p.169-171。

(10)観光地化しているコッペンブリュッゲ城砦の博物館は、地質と自然史学のコレクションや、城砦の防壁に立っている樹齢500～700年という天然記念物のシナノキなどをみることができ、伝承が語りかけてくる不気味な印象とは正反対である。
http://www.visit-germany.jp/JPN/destination_germany/master_tlsight-id1098-fstadt_museen.htm

(11)阿部、前掲書、p.87-88。

(12)同上、p.238。

(13)ジャン・ヴェルドン『図説笑いの中世史』原書房、2002年、p.16-21。

(14)同上、p.42。

(15)「名誉なき人々」と呼ばれたのは、下層民の中で賤民層と呼ばれ蔑視されていた、刑吏、墓掘り人、皮剝人、牢守、塔守、湯屋の主人、亜麻布織工（地域によって異なる）、遍歴芸人、司祭の子、陶工、羊飼いと牧人、煉瓦焼き職人、床屋兼外科医などであり、人によってはその他の職業も挙げている。つまり名誉があるかないか、という境界線を引くのは難しいことであり、概念そのものから曖昧だったのだが、社会はそうした身分に生まれた全ての人々を差別し、教会団体、市民団体からも排除した。

(16)エルンスト・シューベルト『名もなき中世人の日常－娯楽と刑罰のはざまで－』八坂書房、2005年、p.41-173。

(17)同上、p47-48。

(18)同上。

(19)阿部、前掲書、p.85-86。

(20)同上、p.31-32。

(21)http://www.jetro.de/j/hp2007all/foto2007/Backnumber/fotoMai2007.htm

(22)桜沢正勝／鍛治哲郎訳『グリム、ドイツ伝説集（上）』人文書院、1987年、p.287。

(23)阿部、前掲書、p.251。

(24)桜沢／鍛治、前掲書、p.287。

(25)阿部、前掲書、p.242-249。

(26)シューベルト、前掲書、p.171-173。

(27)同上、p.175。

(28)同上。

(29)同上。

(30)阿部、前掲書、p.231-232。

おわりに

(1)図2、図3の出典はそれぞれ以下より転載。

・図2　http://france-tourisme.net/s-Hameln.htm

・図3　http://www001.upp.so-net.ne.jp/yokoo-net/Travel/Hameln.htm

(卒業指導教員 桑原 ヒサ子)